図書館史研究会 ニュースレター
第38号 平成2年2月15日

図書館史研究会事務局
藤野研究室
振替口座 [illegible]3 ☎ [illegible]

本号の主な内容

・ 文献紹介：大塚金之助の図書館体験（小黒 浩司）…… 1
・ 平成元年度決算報告，事業報告 …… 18
・ 平成2年度予算，事業計画 …… 19
・ 運営委員の交替等 …… 19
・ 本年度会費納入のお願い …… 20

文献紹介

大塚金之助の図書館体験

小黒 浩司

はじめに

1933年治安維持法違反の容疑で検挙された東京商科大学（現一橋大学）教授大塚金之助が，出獄から1937年までの3年間，彼の出身校でもある同校図書館の利用を禁ぜられていたということを，筆者は野々村一雄氏の著書で知った。加えて野々村氏の著書に引かれた大塚の文章には，同校図書館のみならず帝国図書館など，日本の図書館に対する厳しい意見が述べられていた[1)]。

筆者は日本の図書館事情・歴史について十分な知識はないのであるが，「思想犯」に対する図書館の利用制限という事例をこれまでに聞いたことがない。そこで興味をもって大塚の著作集（『大塚金之助著作集』岩波書店，1980.6－1981.3，以下『著作集』と略称）を読んだところ，彼が上記のほかにも数奇ともいえる図書館体験を持っており，そうした体験に基づいて図書館にかかわる多くの著述を残していることがわかった。

大塚と図書館との関わりについては，既に松井博氏などによって紹介されてはいるのであるが[2)]，決して斯界共通の貴重な歴史的体験とはなっていない憾みが

ある。大塚の記するところは筆者の専門外の分野であり，周辺資料などの調査も一部を除いて行っていない。ただ彼の遺したものをこのまま見過ごすにしのびず，力量不足を承知で敢えて紹介の稿を起こした次第である。専門家による検証を切に希望する。

神戸高商時代

1910年4月，大塚は神戸高等商業高校（後の神戸商科大学，以下神戸高商と略称）に入学する。父親は彼の進学に反対しており，家計の苦しさもあって学資の援助を受けられなかった。（ちなみに文部省建築課雇だった父は，1903年5月に開校した同校の本館・図書館の建築を担当，1904年8月図書館の竣工とともに解雇され，大林組に転職している。）

参考書の1冊も買えなかった大塚は，毎晩9時の閉館まで同校の図書館で勉強を続け，1911年4月から授業料免除の特待生となった。彼の猛勉は有名で図書館では「ここは大塚金之助の座った机」という伝説が後輩に伝わるほどであった[3)]。

当時の神戸高商図書館長は津村秀松であった。津村は開校からまだ日が浅く教育条件の整っていない同校の“教授室の補充に，図書館といふ大先生を迎えること”を考え，図書館の充実をはかった。1907年に始まる図書館の夜間開館も，彼の手になるものである[4)]。

“図書館といふ大先生”のもとで，大塚の学問研究への道は始まったともいえる。1912年8月，大塚は『神戸高等商業学校学友会報』第61号に「工業的に観たる国際都市の人口集中，積集及其分散策」を発表する。これはプラット著「紐育人口集積の工業的原因を論ず」（コロンビア大学経済学研究叢書第109冊）の結論の概略を紹介したもので，ニュー・ヨーク市が図書館などの公共施設に広大な敷地を与える都市計画を進めようとしていることなどが述べられている[5)]。

『大逆事件』と図書館

神戸高商時代の彼にとって最も衝撃的だったのは，「大逆事件」であったといえよう。そして「大逆事件」とそれを契機にした言論統制こそが，それ以後の彼の生涯を決定付け，また日本の図書館の進路を大きく改変させたのである[6)]。

社会主義根絶政策をとる桂太郎内閣は，1910年幸徳秋水らによる天皇暗殺事件をデッチ上げる。いわゆる「大逆事件」である。事件後文部大臣小松原英太郎は，全国の地方長官に対して，公私立図書館・学校図書館の社会主義図書などの閲覧禁止を命ずる内訓を発した。当局の厳しい締めつけによって，全国の図書館から社会主義文献や無政府主義文献が消えていった。それは大塚によれば，“「社会」

という字のつく本は全部閲覧禁止とな”るというものであった[7]。

神戸高商図書館においても“社会主義の本には禁閲覧の赤い札が貼られ”た[8]。だが館長津村は洋書についてはそれまでと同様に閲覧を許した。経済学者としての良心の行動であろう。

大塚はこの津村の措置によって，無政府主義者ゴールドマン（Goldman, E）の著書を読むことができた[9]。1912年5月，大塚は彼女を紹介する「主義者『ゴールドマン』」を『神戸高等商業学校学友会報』第58号に著した。彼はその冒頭で章碣の「焚書坑」と題する詩を掲げ，「大逆事件」とその後の言論弾圧に抗議する姿勢を示した[10]。

しかし，この一文は当局の忌諱に触れる結果となった。同誌は回収され，文部省は同年6月17日付で同校の水島銕也校長と津村図書館長を譴責処分にした。津村に対する処分理由は“其校図書課主幹トシテ図書ノ取扱上注意ノ周到ヲ欠”いたためである[11]。大塚も特待生の資格を取り消され，その後の原稿や講演は学校によって検閲されるようになった[12]。

東京高商時代

1914年3月，神戸高商を卒業した大塚は，4月東京高等商業学校（後の東京商科大学，以下東京高商と略称）専攻部に進学する。1916年2月に提出された彼の東京高商卒業論文「村落団体ニ関スル学説ノ研究」を見ると，論文作成のために彼が東京高商ばかりでなく，慶応義塾図書館や帝国図書館の蔵書を利用したことがわかる[13]。

一体大塚の学風は，師の影響をうけたドイツ歴史学派的なものである。その後マルクス主義から社会思想史へと彼の研究領域は転換するが，その厳密な文献学的な手法は変わることがなかった。

“すべて一人の学者を知り或は一つの題目について研究を進めるためにはその学者或は題目についてのビブリオグラフィー，書目或は文献目録が役立つ”[14]という考えから，彼は書目・書誌を重視した。書物に対する深い愛情と眼識をもっていた彼はまた，すぐれた蔵書家でもあった。彼の遺したコレクションは原著作の各国訳，研究書や，各国の研究文献目録が網羅的・体系的に揃っており，また各国の研究文献目録や，集書のためのツールも備わっているのが特徴となっている[15]。

1916年3月，東京高商を卒業した大塚はそのまま同校に残り，主に調査部で新聞の切り抜きと分類を担当し，その系統的な方法を学んだ。彼が切り抜き作業を受け持っていた当時は，ロシア10月革命など世界的な重大事件が連続していた時期であり，彼の世界事情観察に役立った。

調査部から離れても大塚の切り抜きは個人的に続けられ，後述する図書カードなどとともに，彼の重要な研究資料になっている[16]。

留　学

1919年から1924年にかけて，大塚はアメリカ・イギリス・ドイツに留学する。この海外留学は，彼に学問的進歩をもたらすが，同時に欧米の図書館を体験する機会ともなった。

5月，大塚はまずアメリカに入る。半年余りの短い滞在期間であったが，その図書館の先進性を見るには十分であった。

図書館経営の最も合理的進歩的なのはアメリカであらう。封建制度を持たなかったこの新国では，すべてを徹底的に合理化することができる。その中央図書館はワシントンのコングレス・ライブラリーであつてそこのカード部には何十人の人が働いてゐる。ここから各章の表題までこまかく印刷した規定カードが全国の図書館に配布され各図書館はこれを著者名カードにもレフェレンス・カードにも幾様にも活用する。著者名カードと件名カードとがＡＢＣ順に同じカード系統のなかに組入れられてゐたのは便利であつた。或る題目についての文献を写し取つたりする手数はいらず，中央図書館カード部へ手紙を書けばカードを安く売つてくれる。

ニュー・ヨーク市立図書館などでも，中央図書館のカードまでが全部わかるやうにできてをり，ゐながらにしてワシントンの本を閲覧する便宜もある。借覧証の運搬は圧搾空気で行はれて本が手元に――英米では座席へ持つてきてくれる――届くのにものの五分とかからない。かうした学問の技術的手段にかけてはアメリカが一番発達してゐる。図書館の内容は国が新しいだけにイギリスほど充実してはゐないが，しかしロシア語ユダヤ語等々の外国文献も相当にある。

ニュー・ヨーク市内には各大学の図書館がある。私がアメリカに上陸してすぐ友人の紹介でコロンビア大学に行つたとき，向ふから見ればどこの馬の骨ともわからない風来坊にその場で書庫のなかの机と鍵とを与へられたのにはこちらが反つてびつくりした。自分の机は経済書架のすぐそばだつたので非常に便利であつた[17]。

大塚は議会図書館の印刷カードが規格的・統一的で，それが広く一般に販売されていることを知り，以後自分の蔵書にもこのカードを使うようになった。また資

料を書き取るメモにも，彼がツェッテルと呼ぶ薄手の標準型カードを使用した[18]。彼は“カードは図書館の鍵である。”といい，“カード作成の技術は，図書館作業の便宜や合理化に重要な関係を持つてゐる。”と考えるのは[19]，ＬＣカードを愛用した彼の実感に基づくものなのである。

1920年１月，大塚はイギリスに渡る。彼はロンドン大学での講義聴講以外の大半の時間を，同大の図書館や大英博物館で過ごした。

講義聴講以外の時間を，わたしは，英国博物館の読書室で過した。ここは紹介状がないと閲覧券をくれないので，わたしは，日本領事館からの紹介状を添えて，手紙で申込むと，数日のうちに，閲覧券が届いた。わたしは，さっそく，読書室の入口をはいろうとすると，係りの人が立っていて，「閲覧券をお持ちですか」と聞くので，わたしは，閲覧券を見せもせずに，ただ，口で，「持っています」と答えると，「いやこれは失礼しました」ですんでしまった。それっきり彼氏は，ほとんど毎日，わたしがその入口をはいっても，何とも云わない。ここは，昔から世界各国の学者や亡命者が集まるところであり，収容力は六〇〇人。各席にはインクとペンと吸取り紙が備えてあり，円形の室の周囲には，各国の百科辞典，辞書等々すぐ必要な書物が何万冊と自由に取り出せるようになっており，どこの馬の骨かもしれないわたしは，ほとんど毎日当時のイギリス学生の流儀にしたがって，スーツケースを持ち込み持ち出し，昼食時間には外出して古本屋で買った本を新聞紙に包んで持ってはいったり持ち帰ったりしても，係りの人は何とも云わず，それでいて，書物が紛失しない――こういうイギリスの社会モラルは，何百冊の書物で知るよりももっと強力にわたしを教育してくれた。[20]

1920年５月，大塚はドイツに入る。ドイツは彼の留学の主目的地であり，1923年まで滞在し，主にベルリン大学で経済学の勉強を続けた。

当時のドイツは第一次世界大戦後の社会的・政治的・経済的混乱の渦中にあった。頻発するストライキ，悪性のインフレーション，飢えと貧しさに苦しむドイツ国民を目の当たりにして，大塚は理論と現実の間で悩み，次第にマルクス主義に近づいていくのである。

ある日，ぼくがウンター・デン・リンデン（Unter den Linden）通りの図書館の門を入ろうとすると，ぼくのまえを歩いていた中年の男性がばたりとぼくの目の前で歩道の上に大の字に倒れた。通りあわせた人たちがかれ氏を図書館

中庭のベンチの上に寝かせて容態をうかがっていると，かれ氏は，ぴりりと手をふるわせて起きあがろうとした。その瞬間の絶望的な，しかし生きなければならないという苦悩の表情は，いまでもぼくは忘れることができない。これが戦争の銃後なのである。[21)]

そうした国内情勢から，ドイツの図書館活動・サービスは著しく停滞していた。国立図書館は戦前約3,000あった外国雑誌数を250に減らし，閲覧を請求した図書は，翌日にならなければ手元に届かなかった[22)]。

図書館の入口で一番悪い印象を残したのは，ベルリンの国立図書館の入口であった。この図書館の二重の鉄門は牢獄を聯想させた。ここでは，入口で一々鞄を開けてなかを調べられた。もっともこれは当時のドイツとしては仕方がなかつた。戦争による経済の疲弊と人心の混乱とは，人を信頼させなかつた。一九二二年八月には，図書館員を買収し主に一七世紀の貴重書を持ち出して売り飛ばした男が警察の手で摘発され，図書館は蔵書調査のため八月から九月にかけて一ケ月閉鎖されるといふ不祥事件が起つた位である（Vossische Zeitung, 26. Aug. 1922)。[23)]

大塚が見たドイツの図書館は，アメリカやイギリスのそれとは全く異なったものであった。そうしたドイツの有様は，彼に日本の帝国図書館の姿を想起させた。

日本では大学の教師や図書館員は多く役人である。役人を思ふと，私はいつもニコライ・ゴーゴリの作『外套』が実によく当時のロシアの官吏気風を画いたのを思ひ起すのである。無口で厳格で規則づくめの上官は，すべて書類は先ず事務局－課長－局長－秘書の手を経て「最後に秘書が吾輩のところに持つてくるのだ」と豪然としてゐる。歩道を歩くとき靴の踵を減らさぬやうに足を運び夜は蠟燭の火まで節約して外套を買ふ写字係のアカーキイ・アカキエヴィッチは，戦々競々として上官の前に慄へながらひたすら写字を楽しみ特殊の文字に愛着を感じてその文字が出てくると制し切れない感動が目元や口元に現はれる。かういふ制度のなかで養はれた図書館員は，その人の技術や良い性格にも拘らず，やはり官僚的な気質を持ち易い。人々は，それをベルリンのプロシャ図書館の入口や上野の帝国図書館の入口に見出すだらう。[24)]

大塚のドイツ時代の業績として忘れてならないのが，メンガー文庫の日本への

将来である。1921年に死去したウィーン大学教授メンガー（Menger，C)の蔵書が，世界的な社会科学書のコレクションであることを知った大塚は，ベルリン留学中の東京商科大学（1920年東京高商から昇格，以下東京商大と略称）の同僚とはかり，その購入を当時の東京商大図書館長三浦新七に相談する。そして大塚や，日本国内での三浦らの奔走によってこれが実現したのである[25]。

マルクス主義へ

帰国した大塚は，東京商大での講義のかたわら，マルクス主義の本格的な勉強を始める。折りからの恐慌下，マルクス経済学の立場から筆鋒鋭く資本主義の矛盾を追求する大塚の名声は高まり，「東の大塚，西の河上肇」と称された。また1928年の第一回普通選挙で労働農民党候補者の応援演説を行なうなど，社会的活動にも取り組んだ。

睡眠時間を削ってマルクスを読んでいたこの時期，図書館にかかわる論述は少ない。だがその思想的深化のなかで，かつて彼自身が経験した図書館の社会主義文献の閲覧禁止措置に対して，次のような認識を示している。

> 幸徳事件の直後，図書館閉鎖によつて貧乏学生は研究の自由を奪はれた。京大事件の後において再び学生の研究自由はふみにじられた。さうして今，治安（ブルジョア私有財産制度と読む）維持法を峻厳化しようとするブルジョアジーにより，三度学生研究の自由は弾圧されつつある。[26]

ここで大塚がいう「京大事件」とは，治安維持法が最初に適用された，いわゆる「京都学連事件」（1925年12月－1926年1月）である。そして1926年6月，治安維持法に死刑などを追加する改悪が行なわれた。大塚は1910年の図書取締りを，学問研究の自由を脅かした悪行として，それらと比肩する存在であると考えるに至ったのである。

この時期大塚はまた，地域の無産者消費組合活動にも参画した。武蔵野消費組合は，1931年7月の第5回国際消費者デーを記念して図書館を作るが，これは同組合理事であった大塚が中心になって設立されたものであろう[27]。

図書館からの追放

1933年1月，治安維持法違反のかどで大塚は逮捕される。以後敗戦までの13年間，大塚はいかなる公職につくことも禁ぜられ，強制失業の生活を余儀なくされた。マルクス主義への道を断たれた大塚は，近代社会思想史の研究に自らを規定

する。

ところが学問研究に没頭しようとした彼に対して，東京商大図書館は彼の利用を認めなかった。彼のような文献学的手法による学者にとっては，彼自身も言うように“この図書館からの追放は致命的”であった[28]。

学校を離れたまずしい一読書生にとっては，図書館こそが命の綱である。しかし，私の勉強目標のためには，日本の首府東京の図書館の状況は，先進文明諸国のそれにくらべて，問題にならないほど，不備，偏狭，不親切，非人間的，かつ役人的であった。私は，一卒業生として，当然，東京商科大学の図書館——経済学にかけては日本第一級のもの——を使うことができたのであるが，同図書館は，一九三四年（昭和九年）から三年間，私の入館を許さなかった。三年後に入館を許されたときにも，私は，学生諸君に接しないことを約束しなければならなかった。したがって，私は，外来者閲覧室の設備がなくなってからは，事務室のタイピストの仕事机のそばで本を見せてもらったのである。[29]

東京商大図書館の利用を禁ぜられた大塚は，1935年に入って帝国図書館，慶応義塾大学図書館，大原社会問題研究所に通うことで，不自由ながらも研究生活を再開した。1935年6月3日付の鈴木安蔵宛の手紙で，彼は次のように述べている。

僕は一学究の態度を守り，生涯もう動揺しません。図書館通ひは主として三田，いかに不完全でも，自己の小書斎にゐるのに比べると，視野が開けて，実にためになります。偏屈な作業は書斎の産物でせう。僕等の友人たちは，まだ図書館の活用さへ十分には知つてゐない！　学問の国ではないからでせう。[30]

とりわけ慶応大学図書館は，図書資料が豊富で，職員のサービスもよかったので足しげく通ったようである。

ＫＯ〔慶応〕大図書館は，当時，日本で唯一の公開大学図書館で，非常に安い入場料で，一般公衆に，いかなる思想のものにも公開されていた。図書館のスタフは非常に親切で，新着の外国雑誌まで心配してくれた。学年試験のまえなどには，閲覧室のシートは満席になるので，「外来者おことわり」の札が出たが，「ぼくはシートはいりません，カード室でカードをひくだけです」と言えば，「どうぞ」と入館が許された。……　昼食どきには，地下食堂のコンクリート壁によりかかって持参のつめたい弁当箱を開いた。当時のぼくは，帰り

の電車賃を気にしなければならなかったので，学生諸君のあったかいミルクや湯気の立つライスカレーなどは，うらやましかった。[31)]

大塚はまた，島木赤彦に師事したアララギ派の歌人でもあった。その歌のなかに慶応大学図書館時代を詠んだものがある。

図書館の／地下食堂の／片すみにて／電車賃の計算を／するべくなりぬ。[32)]

1937年4月，大塚は東京商大図書館の利用を条件付きで許される。

三年たってから，当時の図書館長にひそかにうかがいをたててみたら，入館は許すが学生と話をしてはいけない，ということだった。これは，学生諸君といっしょに一般読書室にははいれないことを意味し，ぼくは教員用の別室閲覧室を使わせてもらったが，この室が本の置き場に変わってからは，事務室のタイピストのとなりの小さなデスクに坐った。タイプのそばでは本は読めない。[33)]

まがりなりにも東京商大図書館の利用ができるようになったことは，彼にとって大きな喜びだった。1937年5月29日付の神戸高商時代の恩師坂西由蔵宛の手紙には，その喜びと，それまでの3年間の苦しみが書き綴られている。

先生，五月二十五日以来，商大図書館に通つてをります。妻は，何をさうニコニコしてゐるか，身体がよほどいゝのか，仕事がすすむのかと問ひます。僕は言ひます，さうぢやないよ，図書館だ，商大図書館に入れたのだ，勿論不自由で書庫などへは入れない，書庫に入る旧同僚の姿を指を加(ママ)へて見送つてゐる，僕はペコペコと事務員にあたまを下げてゐる，しかし三田では一八五〇〔年〕前の書物を閲覧室へ出してくれない，書物は二部四冊に限定される，一つの辞書を引くにも苦しむ，途中二度の乗替をして疲れる，この図書館さへもし外来者を入れなくなったら僕は――否多くの民間研究家は学問をやめるのだ，つまり僕は学問の最低生活標準にあつてやつとかゆをすゝつていのちをつないでゐたにすぎぬ，学問で生きるものに武器を与へずに元気になれと言つても無理だ，僕はこの三年間三田で生(なま)ごろしだつたのだ，剣士に剣を与へずに元気を出せと言つても無理だ，同じやうに学者に一冊や二冊の本を与へてもだめで図書館を与へねばならない，商大図書館は，僕にとつては生き返るやうなよろこびだ，このよろこびは生涯忘れられない，だから僕はこの節ニコニコしてゐるのだ，

と。

商大図書館もとより不完全です，しかしそこで一卒業生として受ける便利は三田の比ではありません。……全く三田の三年間はつらかつたです。しかしこゝでの唖の三年はむだではありません。先日私は，三田でいつもの私の前に坐つて無言で私を見てゐた学生だつたといふ一人の雑誌記者に会ひました。唖もまた決して孤独ではありません。かういふかくれたところに，多くの唖が世に力を養つてゐることが，段々にわかつて来ます。ドイツでも，イタリアでも，同じだらうと思ひます。

……私は，学生と話をしないといふ条件をよく守つてゐますが，まだ慣れないためでせう，十五年の修業時代を投じた学園の学生を見ては見ず知らずの一人一人の学生にも話しかけたい気持ちです。当分はこゝの修業は努力を要します。話したくなるときは，ポケットからプーシュキンのドイツ訳（モスコウ版一九三六年）を出して，池のそばの芝生にひつくりかえつてこの作家のもつ迫力，押へるものを下から持ち上げるやうな力と話をするのです。……

……日本の新聞やラヂオがもう一面的情報にしかすぎず，外国電報がドイツを通して来るやうになつてゐますので，……当世万事ニッポン流行の世ですが，実は世界はドイツとイタリアとニッポンだけが世界ぢゃない，反対にこのファッショ・ルートは全世界の××戦線に囲まれてゐるのです。[34]（傍点・送り仮名，ママ）

大塚の見た日本の図書館

3年間の不自由な図書館通いのなかで大塚は，日本の図書館の欠陥を強く感ずるようになった。彼は利用者の立場から，そうした問題点を鋭く指摘する文章を次々と公表するのである。

一国の中央図書館が首都の中央になくて交通不便な一隅にあつたり，中央図書館がその本来の使命から外れて，専門研究家よりも試験勉強家に利用されてゐたりするのは，日本の特殊風景である。『東朝』三月三十日によると，試験期には一日約二千人が一年では約四十五万人の閲覧人があり，そのうち男子の六三％は学生ださうである。

中央図書館の門前に二十台も自転車がおいてあつたり，試験シーズンになると午前八時前にもう何百人もの人が列を作つて入館を待ち，三，四人の係員がその整理のために立番をしたり，八時半になるともう五十人位の人が立つたまま入場の順番を何時間も待ち，その大多数が中等程度の学生であつたり，拡声

器で時々入場番号を呼び込み番号が過ぎればその番号は無効になるといふやうな風景は，世界のどこにもない。やつとの思ひでなかに入れば，閲覧室は文字通り満員で，足音や話声が交錯して落ちついた静かさもなく，地下食堂はもうもうと煙草の煙が込めて学生達が大声で歓談してゐる。

このことは，日本人の生活にとつては学生用参考書もすでに高価であること，日本の住宅が音響に対して抵抗力がなく寒気を防ぐのに金がかかること，学校に読書室の設備がなく民衆読書制も欠如してゐることなどに因由してゐると思はれる。だから閲覧人数で学問慾や研究心を測定することは出来ない。

中央図書館があまり役に立たない日本では，公開されてゐる唯一の慶応義塾大学図書館が砂漠のなかのオアシスである。もつともここも試験期には外来者入館お断りだし，また入つても禁煙のカード室などは喫煙雑談場と化してカードを引くにも身動きも容易でないことがある。

日本の図書館は学問などをするやうにできてゐないと断念する人があるかも知れないが，この国で学問でもしようと言ふからには，かうした困難を長い間に亙つて克服する意気込みがなくてはならず，現にかうした図書館難を乗切つて研究に精進してゐる民間研究家もすでにあるので，私にとつてはよい刺戟である。[35]

帝国図書館は“大切な中央図書館の任務よりも受験準備図書館の任務に忙殺されてゐ”た[36]。一方大学図書館は，それ故にその社会的責任は重大なのであるが，実際は慶応大学以外の大学図書館は非公開であり，“相互に資料の殺し合ひ”を行っていた[37]。“大学を離れてゐる一般読書家や研究家は図書館に飢ゑてゐるのである。”という大塚の表現は[38]，あながち誇張ではあるまい。

1937年の秋，『帝国大学新聞』の主催で「図書館を語る座談会」が行われた。この会には利用者側から大塚らが，図書館側からは秋岡悟郎（日比谷図書館），高柳賢三（東大図書館），竹内善作（大橋図書館）などが出席した。この席でも大塚は，彼の経験をもとに全国的な書籍総合目録作成の必要性などを提言している[39]。

さて，1935年から1940年にかけて書かれた大塚の社会思想史関係の論著の多くは，戦後第1冊の岩波新書（青版）となった『解放思想史の人々——国際ファシズムのもとでの追想，一九三五－四〇年——』に収められている。つまり彼はこの時期“ひろく，人類的・民族的・政治的・警察的・宗教的・性別的・社会的・階級的な圧迫，迫害，無知，偏見および迷信からの”人類の解放という観点から[40]，

研究を続けていたのである。

その『解放思想史の人々』に限らず，この時期の彼の著作には，「見たかった書物は図書館になかった」という趣旨の表現が頻出する。しかも彼は多くの場合，図書館で見ることができなかった本の書名などを，克明に書き残している。

彼が図書館で見いだせなかった図書は，決して特殊なものでも，「危険」なものでもない。彼が「世界古典」，あるいは「世界文献（Weltliteratur）」と称する，欧米の基本的・古典的な社会科学文献が大半である。大塚は問わず語りに日本の図書館の蔵書構成の偏向と，それによる貧しさを糾しているのである。

大塚が図書館の蔵書の貧弱さを指摘するのは，自分が読みたかった本がなかったことに対する「私怨」に基づくものではない。“書物の選択は，何よりも思惟の自由，書物選択の自由，社会の情勢 ……に支配され”ると考える大塚は[41]，図書館のカードを引くことで当局の長年の思想統制を察知したのである。

> 日本ほど図書館難のひどい国は文明国のどこにもない。第一，公設図書館だけにたよつてゐては，もはや今日の世界の学界の進展が充分にはわからない。今日の図書館経営が，予算，図書購入法，専門化，語学制限，思惟制限に制約されてゐるからである[42]。

大塚は日本の「図書館難」の政策的な側面を見抜き，国民が「水のカーテン」[43]によって世界的な知識・教養を獲得する術を奪われている現状を痛感した。大塚の図書館に対するこの時期一連の発言は，ファシズムに冒され破局への加速度的な歩みを続ける日本と，それに追従する図書館に対する強い危機意識の表れともいえよう。

フランクリン研究

1945年８月，日本は無条件降伏し，大塚の苦難の時代も終わった。12月，東京商大（当時は東京産業大学といった）に復職した大塚は，翌年２月から３月にかけて「経済学史特別講義」を行なう。

講義の冒頭大塚は，学生たちに

一、　諸君は第二次世界大戦の子供である。
二、　諸君には希望があり，諸君は自由を持つてゐる。
三、　諸君には二〇世紀の世界がわかりやすくなつてゐる。
四、　諸君は約一〇年のギャップを埋めなければならない人たちである。

五、　人類文化への寄与といふことは，容易なわざではない。

と呼びかけ[44]，自らの苦難の歴史を語るのである。

この講義のなかで大塚は，18世紀のアメリカを講ずる。それはアメリカの独立を“一八世紀民主主義の先端”とし，アメリカ革命を“一八世紀世界の人類解放の先駆者であり，前衛隊であつた”ととらえるからである[45]。

大塚はフランクリン（Franklin, B.）を，アメリカ革命の指導者の一人として取り上げる[46]。大塚はフランクリンを“一八世紀の特色たる「世界市民」であり，一八世紀の進歩的市民の大きな一代表者であり，アメリカが出した最初の近代文化人であつた。”と高く評価する[47]。

大塚はフランクリンの業績の一つとして，1731年に彼が中心となって設立された図書館を挙げる[48]。大塚のフランクリン研究は，東京商大図書館や慶応大学図書館での文献調査という形で，1938年には始められていた[49]。1940年4月17日付の河上肇宛の手紙では，大塚はフランクリンを“アメリカ図書館事業の父”と呼び，彼の集めた本に宗教書がなかったことに注目している[50]。

1940年はフランクリンの死亡 150年にあたった。大塚はそれにあわせて彼のフランクリン研究の発表を計画していたのであるが，翌年の太平洋戦争開戦を前にした対米感情の悪化から，それを断念せざるを得なかった[51]。しかし彼のフランクリン研究そのものは，戦局の悪化のなかでも，中断することなく継続されていた。

空襲と爆撃のなかで，ぼくは，敵性人物フランクリンの勉強をはじめ，四四〇枚の書きぬきノートをつくった。そのあるページには，「このとき警戒警報が解除された」と書かれている。[52]

「思想犯」大塚は，特高や憲兵の厳しい監視を受けていた。1940年から翌年にかけて，当局の弾圧は一層強化された。大塚は私有が許されなくなったマルクス主義・社会主義・自由主義の1,500冊余りの和洋書・雑誌や書き抜き・原稿類を，自らの手で焼き捨てなければならなかった。彼は圧倒的なファシズムの攻勢のもとで，抵抗の一つの証しとして，フランクリンの研究を続けるのである。

私は，日本にはフランクリンの学問的・文化的重要性に着目する経済学者はないのかと思つてゐたのですが，……私個人としては，アメリカ最初の近代文化人と云はれてゐるこの人の文章を読むと，自分のなかで死滅しかかつてゐる

探究心が起重機で引き起こされるやうな気がするのです。[53]

大塚のフランクリン研究は，きわめて困難な環境での研究にもかかわらず，彼の文献学的手法が堅持されている点で貴重であろう。アメリカ図書館史は筆者の専門外の分野であり十分な知識はないのであるが，『フランクリン自伝』異版の検討から筆を起こした論者を知らない。フランクリンの図書館の成立を以て「図書館における近代」が成立したとするならば，大塚の研究は社会思想史の立場からアプローチされた文献として，また戦前におけるフランクリン研究を総括する文献としても，今日的価値を持つものといえよう[54]。

おわりに——大塚の「世界大戦図書館」構想

日本の敗戦が決定的となった1945年夏，大塚は秘かに「世界大戦図書館」構想をまとめる[55]。公職を追放された大塚は，三井物産の友人の援助などを受けて生活を支えていた。この構想も三井の支援を前提にしており，おそらく財閥解体によって三井のバックアップが不可能になったためであろう，残念ながら実現はされなかった。

第一次世界大戦後，日本を除く世界各国は戦争関係文献の収集などの事業を行なった。大塚は日本が二度と悲惨な戦争を繰り返さないために，「世界大戦図書館」開設を思い立ったのである。

彼の「世界大戦図書館」はさらに，“日本における図書館の模範たらんことを期す”ものでもあった[56]。これまで見てきたように，日本の図書館は彼をはじめとした利用者にとって，あらゆる面において決して満足のいくものではなかった。この構想のなかでも大塚は，『図書館総覧』1937年版によって，世界の図書館と日本の図書館を比較し，如何に日本の図書館が貧弱であるかを示す。大塚は敗戦後の日本の図書館が平和と自由の砦としてよみがえることを願い，「世界大戦図書館」を，その指標として構想したのである。

大塚は戦前の日本において，最も深く図書館の役割を理解し，また最もすぐれた利用者の一人であったといえよう。そしてそれ故に大塚は，日本の図書館が抱えていた幾多の欠陥によって，最も甚大な被害を受けた一人でもあった。この拙い一文によって，大塚金之助という人物が見直され，彼の図書館体験を斯界が歴史的教訓として共有する端緒となれば幸いである。

注

1）　『回想満鉄調査部』勁草書房，1986.4，p.420-422.

2）　「大塚金之助先生と図書館の一断面――研究者と文献――」『日本の科学者』vol.15，no.7，1980.7，細谷新治「暗い谷間の時代と図書館――大塚金之助先生の研究生活にふれて――」『図書館雑誌』vol.76，no.8，p.465-467，大橋敏典「利用者が書いた図書館論」『前掲誌』p.484-485 等参照。なお松井氏には氏の論文のコピーの恵与にあずかったほか，大塚に関する研究文献について，貴重な教示を受けた。附記して謝意を呈したい。

3）　津田内匠「解説」『著作集』第1巻，p.532 に引く神戸商大凌雪五〇年編集委員会編『凌雪五〇年』1954.5，p.145.

4）　津村『春秋箚記』小山書店，1940.3，p.201-202.　また津田「解説」『著作集』第1巻，p.533 参照。

5）　『著作集』第1巻，p.43.

6）　大塚と図書館の関わりについて調査を進めるなかで，筆者は「大逆事件」が図書館に大きな影響を及ぼしたことを示す資料をいくつか見出した。別の機会に紹介したい。

7）　「成長」『鉄如意』1930.10，『著作集』第1巻，p.463.

8）　「わが道経済学」『朝日新聞』（夕刊）1969.12.8-16.『わが道Ⅱ』朝日新聞社，1970.5に再録，『著作集』第1巻，p.503.

9）　大塚は別のところで“或る時図書館員の手落ちで，新刊書 Emma Goldman, Anarchism and other Essaysを読んで，校長や図書館長に御迷惑をかけたことがあります。”ともいっている。〔二五年前の愛読書，刊行書，出版界の状況について〕（葉書質問回答）『東京堂月報』第25巻第10号，1938.10，『著作集』第5巻，p.363.

10）　『著作集』第1巻，p.16.

11）　『官報』8698号，1912.6.18，p.337，「水島氏譴責事情」『神戸又新日報』1912.20，2面，また津田「解説」『著作集』第1巻，p.537-543 参照。

12）　前掲「わが道経済学」『著作集』第1巻，p.504.『官報』8704号（1912.6.25，p.492.）によれば，6月21日付で校則第42条によって特待生罷止となっている。

13）　「村落団体ニ関スル学説ノ研究」〔卒業論文〕，1916年2月提出，『著作集』第1巻，p.295，299-300参照。

14）　「マーシアル新版新序」1937.4.10 付　未発表手稿　『著作集』第1巻，

p.359.

15) 細谷新治「解説」『著作集』第5巻，p.579-580.

16) 「新聞切りぬき四十年」『同盟時報』1953年10月号，『小倉金之助　大塚金之助　上原専禄集』東京創元社，（現代随筆全集　第25巻），1955.2に再録，『著作集』第6巻，p.321-326 参照。

17) 「図書館から」『神戸商大新聞』第60号，1935.4.20.　『著作集』第5巻，p.5-6.

18) 「大学教師生活の思い出（一）——学生時代から留学時代まで——」『思想』第 352号，1953.10.『学究生活の思い出』宝文館，1954.6に再録，『著作集』第1巻，p.477.また前掲細谷「解説」『著作集』第5巻，p.566を参照。

19) 「一外来者の見た大学図書館」『三田評論』第 480号，1937.8.『著作集』第5巻，p.20.

20) 前掲「大学教師生活の思い出（一）」『著作集』第1巻，p.481-482.また「ブリティシュ・ミュージアムの読書室」『読書春秋』第8巻第6号，1957.6.『著作集』第5巻，p.50-54 参照。

21) 『ある社会科学者の遍歴——民主ドイツの旅』岩波書店，1969.5.『著作集』第7巻，p.16.

22) 前掲「図書館から」『著作集』第5巻，p.6.

23) 前掲「一外来者の見た大学図書館」『著作集』第5巻，p.15.

24) 前掲「一外来者の見た大学図書館」『著作集』第5巻，p.17.

25) 「カール・メンガー文庫の思い出」『読書春秋』第8巻第10号，1957.10.『一橋大学付属図書館史』1975.10に再録，『著作集』第1巻，p.451-457，「メンガー文庫」『Hitotubashi in Pictures』1951.2.『著作集』第5巻，p.47-49.

26) 「二十五年」『筒台学報』第203号，1928.6.19.『著作集』第1巻，p.176.

27) 『恐慌と我等の消費組合—— 一九三一年七月四日第五回国際消費組合デー』武蔵野消費組合，1931.9.『著作集』第3巻，p.349.　また大串夏身編『三多摩社会運動史』三一書房，1981.7，p.96所収の『消費組合新聞』24号，1931.7.21 を参照。

28) 前掲「わが道経済学」『著作集』第1巻，p.512.

29) 『解放思想史の人々　国際ファシズムのもとでの追想 1935 －40年』岩波書店，1949.4（岩波新書　青版1）『著作集』第4巻，p.93.

30) 『著作集』第10巻，p.30.

31) 「ぼくの最終講義」(未発表手稿)(1974.3.29)『著作集』第4巻，p.453.

32) 『鵞』第8号，1970.8.『著作集』第9巻，p.309.

33) 前掲「ぼくの最終講義」『著作集』第4巻，p.453.

34) 『著作集』第10巻，p.45-47. なお津田内匠氏は「大塚金之助——切抜き台紙が語る——」(『図書』370号，1980.6，p.50)において，『著作集』未収の4月18日付の坂西宛の手紙を引用して，この東京商大図書館利用許可の件を紹介している。

35) 前掲「図書館から」『著作集』第5巻，p.3-7.

36) 前掲「一外来者の見た大学図書館」『著作集』第5巻，p.16.

37) 「大学図書館」『帝国大学新聞』第634号，1936.7.6.『著作集』第5巻，p.12.

38) 前掲「大学図書館」『著作集』第5巻，p.12-13.

39) 「図書館を語る座談会にて」『帝国大学新聞』第696号，1937.11.25.『著作集』第5巻，p.25-29.

40) 前掲『解放思想史の人々』『著作集』第4巻，p.89.

41) 「余暇の読書についての答へ」『婦人公論』第22巻第8号，1937.8.『著作集』第5巻，p.124.

42) 前掲「大学図書館」『著作集』第5巻，p.11.

43) 「サンガー夫人——産児調節と平和——」『婦人朝日』第7巻第12号，1952.12に「産児調節と平和——来朝のサンガー夫人のことども——」の題て初出，後『小倉金之助　大塚金之助　上原専禄集』に加筆，改題して再録，『著作集』第6巻，p.47.

44) 「経済学史特別講義　速記録」(未発表手稿，徳永幸速記)『著作集』第4巻，p.36. また大塚は“諸君は約一〇年のギャップを埋めなければならない人たちである。”ということに関して，“図書館に本がないのですから，自分たちで埋めなければならない。”(p.59)とも言っている。

45) 「ベンジャミン・フランクリン講義ノート抄」(未発表)『著作集』第4巻，p.360-361.

46) 前掲「経済学史特別講義　速記録」『著作集』第4巻，p.75-81 参照。

47) 「ベンジャミン・フランクリン講義ノート抄」『著作集』第4巻，p.370.

48) 前掲「経済学史特別講義　速記録」『著作集』第4巻，p.81. また「ベンジャミン・フランクリン講義ノート抄」『著作集』第4巻，p.377-380. を参照。

49) 1938年2月2日付大塚富士夫宛手紙『著作集』第10巻，p.444.

50)　『著作集』第10巻，p.60-61.

51)　前掲『解放思想史の人々』『著作集』第４巻，p.90.

52)　前掲「わが道経済学」『著作集』第１巻，p.514.

53)　「三文文庫通信（二）　故Ｇ．Ｉ君の蔵書」未発表手稿，1943.5.14 『著作集』第５巻，p.275.

54)　前掲「ベンジャミン・フランクリン講義ノート抄」『著作集』第４巻，p.356-382，また「日本におけるフランクリン」『学燈』第53巻第６号，1956.6.『著作集』第４巻，p.438-444 等参照。

55)　「世界大戦図書館（私案）」（未発表手稿）(1945)『著作集』第５巻，p.33-46 参照。

■ 1989（平成元）年度　決算報告

〔収入の部〕

１）会費	147,970
２）前年度繰越	235,932
３）利子	3,374
合計	387,276

〔支出の部〕

１）ニューズレター作成発送費	84,270
２）事務局費	45,526
３）機関誌版下作成費	160,680
３）次年度繰越	96,800
合計	387,276

監査報告

１９８９年度の監査の結果，帳簿の記入，事務処理が適正に行われていたことを報告します。

１９９０年１月１０日

監事　根本　彰　印

中林　隆明　印

■ 1989（平成元）年度　事業報告

・　第７回図書館史を考える名古屋セミナー　　1989年８月30日～31日
・　機関誌『図書館史研究』第６号の発行
・　ニューズレター34号（３月），35号（５月），36号（７月），37号（11月）

■ 1990（平成２）年度　予算

〔収入の部〕

１）会費	130,000
（現会員中13名過年度支払済）	
２）前年度繰越	96,800
合計	226,800

〔支出の部〕

１）ﾆｭｰｽﾚﾀｰ 作成発送費	90,000
２）事務局費	70,000
３）予備費	66,800
合計	226,800

■ 1990（平成２）年度　事業計画

①第８回図書館史を考えるセミナーの開催
　夏期　関東において２日間の予定
②機関誌『図書館史研究』第７号の発行
③ニューズレターの発行
・　第38号 …… 1989（平成元）年２月　・　第39号 …… ６月
・　第40号 ……　〃　９月　・　第41号 …… 11月

■ 運営委員等の交替について

本年１月17日に開催された第29回運営委員会において，新しい運営委員会の体制が，以下の通りに決まりました。　任期は，1990（平成２）年１月１日～1992（平成４）年12月31日となります。

運営運営委員
・鮎沢　修　（聖徳学園短大）
・石井　敦　（東洋大学）
・宇治郷　毅（国会図書館）
・奥泉　和久（横浜女子短大図書館）
・加藤　三郎（名古屋鶴舞図書館）
・河井　弘志（立教大学）
・川崎　良孝（椙山女学園大学）

編集委員
・宇治郷　毅（国会図書館）
・奥泉　和久（横浜女子短大図書館）
・宮部　頼子（恵泉女学園短期大学）
・油井　澄子（国立教育研究所）

・工藤　一郎（東京大学図書館）
・是枝　英子（専修大学）
・塩田　一徳（大東文化大学図書館）
・天満隆之輔（羽衣学園短大）
・常盤　繁　（東洋大学）
・藤野　幸雄（図書館情報大学）
・宮部　頼子（恵泉女学園短期大学）（本年４月赴任）
・油井　澄子（国立教育研究所）

監　査
・中林　隆明（国会図書館）
・根本　彰　（図書館情報大学）

事務局長
・寺田　光孝（図書館情報大学）
＊寺田氏の留学期間中に限り臨時代理　　山本　順一（図書館情報大学）

事務局より

・　１月17日に第29回運営委員会が開催されました。そこでは，上記の通り，前年度の決算，事業についての報告が承認され，本年度の予算，事業計画が審議，了承されました。また，上に掲げた新体制が決まりました。

‡　同封しました用紙をご利用のうえ，本年度の会費￥1,000 をご納入願います。

‡　本年度の緑陰セミナーは，**別紙の通り**，９月１日（土）～２日（日），大東文化会館で開催されます。別紙要領にしたがい，６月12日まで（同会館申込の都合上）に河井弘志先生宛お申し込み下さい。多数のご参加を期待しております。

‡　今回のニューズレターには，400 字詰め原稿用紙に換算すると50枚を優に越える，小黒浩司氏の興味深い長編力作「大塚金之助之図書館体験」の一挙掲載に踏み切りました。会員諸氏の図書館史研究に裨益するところが少なくないと思います。

次号以降のニューズレターの原稿を広く募っています。テーマ，分量は問いません。図書館史に関わることであれば大歓迎。

（Я）